

報告

第95回北海道医学大会総会

常任理事・学術部長 櫻井 晃洋

今年度は、旭川医科大学吉田学長を会頭とし、39の分科会が参加して第95回北海道医学大会が開催された。

10月3日（土）の総会では、北海道医師会賞ならびに北海道知事賞贈呈式、各科トピックス、特別講演などがあった。

今回は、各科トピックス、特別講演の講師の諸先生にお願いし、寄稿していただいた。

◆各科トピックス

1. 「輸血副作用の原因解明の現状とその予防法をめぐって」

旭川医科大学

小児科学講座 教授 東 寛
座長 北海道大学大学院医学研究科

小児科学 教授 有賀 正

2. 「覚醒下で行う脳神経外科手術の意義」

札幌医科大学医学部

脳神経外科学講座 教授 三國 信啓
座長 旭川医科大学

脳神経外科学講座 教授 鎌田 恭輔

3. 「生活習慣と健康—人を対象とした研究から—」

北海道大学大学院医学研究科

公衆衛生学 教授 玉腰 暁子
座長 札幌医科大学医学部

公衆衛生学講座 教授 森 満

4. 「高齢者の貧血-その新展開」

勇気会医療法人北央病院

院長 坂牧 純夫
座長 北海道医師会

常任理事 櫻井 晃洋

◆特別講演

「日本医療研究開発機構（AMED）のミッションと課題」

講師 日本医療研究開発機構理事長 末松 誠
座長 第95回北海道医学大会 会頭 吉田 晃敏

輸血副作用の原因解明の現状と その予防法をめぐって

旭川医科大学 小児科学講座

教授 東 寛



東教授

はじめに

「血液製剤による副作用の多くは、生命に危険を及ぼすものではないが、患者と主治医にとっては、解決すべき問題であり続けている。輸血が必要な患者は、重症な場合がおおく、すでにさまざまな医学的処置を受けたり薬を投与されている。従って、些細な副作用であっても、本人にとっては大きな負担になっている。」¹⁾

輸血を介して発症する感染症を除くと、輸血による副作用は、溶血性副作用と非溶血性副作用に大別される。溶血性副作用は、血液型不適合輸血で発生する事が分っているので、患者と同じ血液型のドナーから輸血を行えば、理論的には予防可能である。しかし、それ以外の原因で起こる副作用は、非溶血性輸血副作用と総称され、その原因は、ごく一部を除いて、現在でも不明のままである。非溶血性輸血副作用を症状別に分類すると（表1）のようになる。最も重篤で致死率の高い副作用が、輸血関連急性肺障害（TRALI：Transfusion-related acute lung injury）である。

（表1）非溶血性輸血副作用-----その兆候と症状

・アレルギー反応	: かゆみ, 掻痒感, 発赤, 発疹, 蕁麻疹, 呼吸困難(チアノーゼ, 喘鳴)
・FNHTR (febrile/chill type reaction) (inflammatory reaction)	: 発熱, 寒気, 熱感
・TRALI	
・その他	: 吐き気, 嘔吐, 腹痛, 低血圧, 意識低下, 心悸亢進, 頻脈, 頭重感, 頭痛,

愛知医科大学 輸血部 より